

第一之圖

「石井惣治商店」

上山市十日町四一十四



出典：かみのやま 街の記憶 時のスケッチ

著：酒井 信一郎

通りニワより道路側を見る



何処の町でも、歴史の香りがする町並を歩くことは気持ちよいもの。ここ上山も例外ではなく、そんな町並を形成する建物がいくつも存在する。それらを外から眺めるだけでなく、家屋の中を拝見し、伝わる歴史の一端を伺ってみようと、軒先に雪が残る二月十二日に探偵団は動き出した。メンバーは、この企画の発案者で建物への道先案内人の防災屋小松氏、観光ボランティア富山女史。役場関係の諸氏、そして筆者。

今回が探偵団第一回目の報告である。

当代で十九代になるといふ石井家。その歴史は最上義光と上杉軍の決戦場、慶長五年（一六〇〇年）の長谷堂合戦、「東の関ヶ原」と言われた戦のあった時代に移り住み、上山の地で商いを始めた。

当初は漆器の取り扱いを行ない、曲折を経て現在の商売になったということである。確かに安政二年発行の「東講商人鑑」という旅の地図本に「漆屋伊惣治」が記述されている。

明治の後半に造られたというこの建物の間取りの特徴は、町屋のプランに多く用いられた通り二ツの形式をとっていること。建物の様相は内外共、古民家によく見られるのと同様に、柱、梁または根太、タル木まで、木造の構造の主要な部分をそのまま表し、力強く、光と影の織り成す豊かな空間になっていること。それは、木造の伝統的工法でしっかりと組み構築していったもので、今の建設現場ではなかなかお目にかかれるものではない。

それから、部戸（しとみと）やくぐり戸の仕掛けも体験させてもらった。おもしろいし、実にうまくできている。戸袋収めの開口もきれいなものだ。むくりをつけた二階の底だつて、手間のかかったいい仕事である。それもこれも、今まで上手に使いこなしてきたからである。

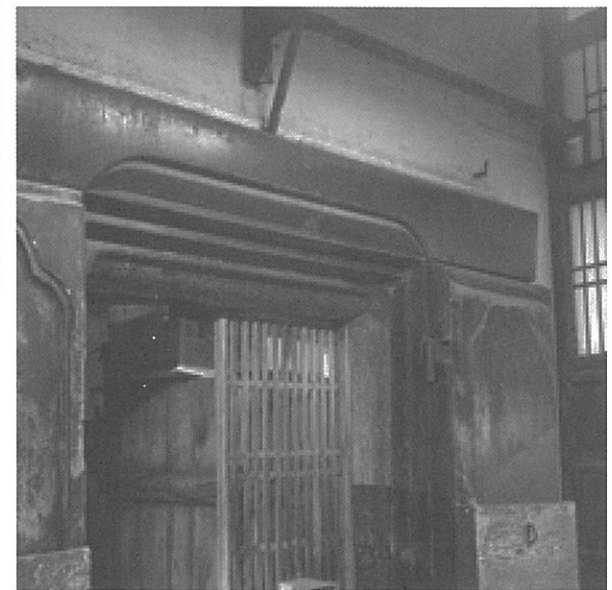
話を伺ったのは当主石井茂吉さん。大火をくい止めた庭の大木、三日三晩の自宅での結婚式など、伺った話も面白く、興味は尽きないものであった。



道路側の2階の木製格子



櫺板の部戸



味噌、醤油が醸造される蔵の入り口廻り